東大寺慶讃能

KEISAN-NOH

ごあいさつ

「東大寺盧舎那大仏の造顕を発願されました聖武天皇のみこころをしのび、大仏様に日本を代表する伝統芸能である『能楽』を奉納することで、共に生きる喜びを表現しよう。」

そのような思いから、春（聖武天皇をおまつりする「聖武祭」の日、例年5月2日）と秋（大詔を発せられた天平15年10月15日にちなみ、例年10月15日）に慶讃能を奉納させていただいて参りました。

盧舎那大仏造顕の発願から1282年の時空を超えた現代におきましても、国家の安泰と人々の幸せを願われた聖武天皇のみこころをしのぶことの大切さを、本慶讃能を奉納させていただきますことによって、多くの皆様に伝わりますよう心より願っています。

We have dedicated a NOH to the big BUDDHA to think of the emperor SHOMU, who proposed to build a big BUDDHA in Nara in the 8th century. He decided to carry out such a great project for the sake of calming some confusion caused by plague or disasters that had distressed people in those days. So, now we express our pleasure of life in peace by dedicating noh performance. The reason why noh is chosen for a dedication is it is the most traditional performance in Japan.

Twice a year (2, May and 15, Oct.), Todaiji temple performs noh for dedication. 2,May is the day of festival for emperor SHOMU, and 15, October is the day when the emperor made his desire public. It is 1282 years before when the big BUDDHA was planed to be built. We hope we will have conveyed the emperor's wish for peace and happiness in the nation in the years ahead.

二〇二五年十月十五日(水)　午後一時半始

大仏さま秋の祭り

東大寺慶讃能

於　東大寺鏡池特設舞台

（雨天　東大寺総合文化センター金鐘ホール）

ご挨拶　前後のいずれかで実施

仕舞

半部　山下あさの　梅若雄一郎

駒之段　生一　知哉〇　山田　薫　笠田　祐樹

独吟

野守　山田　伊純

能

采女　有松　遼一　山中　雅志〇　森山　泰幸　貞光　訓義〇　荒木　建作〇　茂山　忠三郎〇　梅若雄一郎　山田　薫　井戸　良祐〇　笠田　祐樹

〇印は重要無形文化財総合指定保持者

主　催／東大寺慶讃能実行委員会　　主　管／奈良新聞社

協　賛／㈱柿の葉すし本舗 たなか・㈱尾田組・日本料理花鹿・菓匠 千壽庵吉宗

協　力／山中雅志・ひかり装飾株式会社

演目の説明

●仕舞「半蔀」

雲林院の僧が一夏の安居の修行（九十日間籠もる座禅行）も終り立花供養を行っていた。
すると一人の女が現われ、ひときわ美しく可憐な夕顔の花を手向けた。女は五条あたりに住んでいると言い残し花の影に隠れて見えなくなってしまった。女性の名前は夕顔の君と言うらしい。夕顔の君は、光源氏の恋人のひとりで光源氏はいたく心ひかれ情熱的に愛したがそれは束の間の事、夕顔の君に悲劇が襲いかかる。物の怪に殺されてしまったとの事、里の者から夕顔の君と光源氏との恋物語を聞いた。哀れみを感じた僧は夕顔の君が住んでいた五条を尋ねることにした。そこは、昔のままの佇まいで夕顔が咲く寂しげな家ではあった。たたずんでいる僧の前に夕顔の君の霊が現れた。その夕顔の君の霊は、光源氏との恋の思い出を語り悲しく舞を舞いながら夜が明けきらぬ内に弔いを僧に頼み半蔀戸の奥に静かに消え去って行くと共に僧は夢から覚めて行った。

●仕舞「駒之段」

小督局の失踪により悲しみが癒えない高倉天皇から、源仲国に小督局を探しだせとの命令が下った。源仲国はすぐに馬上で鞭を持ち、狩衣の肩を結んで嵯峨野に馬を進めた。その頃、小督局は片折戸の家の主人から琴を弾きかなでて欲しいと頼まれた。（ここからが駒之段）小督局の弾く「想夫恋」の曲で居場所を知った源仲国は問答のすえ、高倉天皇の文を小督局に渡した。小督局は、楊貴妃や李夫人のように寵愛されている我が身を思い高倉天皇に返事をしたためた。小督局からの返事を懐中して帰ろうとする源仲国は役人に引き止められ、その場で酒宴となり源仲国は男舞いを舞い場を盛り立てて終宴を向かえた。やがて時が経ち源仲国は帰路についた。

●独吟「野守」

出羽の国、羽黒山の山伏は葛城山へ旅に出て春日の里に到着した。そこで1人の老人と出会った。老人は、春日野の野守で、池を守っている野守であると言った。山伏が正面にある池の名を尋ねると、老人は「これこそ野守の鏡と申す池。野守の鏡は、昔鬼神の持ちたる鏡だった」と言う。昔この野に鬼がいて、昼は人の姿で野を守り、夜は野にある塚に入って住んでいたと老野守が語る。野を守った鬼が鏡を持っていたことから「野守の鏡」だと語る。「その野守の鏡をこの目で見てみたい」と老人に言うと「鬼の持つ鏡は恐ろしいものである」と言い、老人は塚の中に消えて行った。山伏が塚の前で祈りを始めると、塚の中から、光輝く鏡を持った鬼神が恐ろしい姿で現われた。鬼神は鏡で四方八方、天界から地獄まで天地のすべてを鏡に映し出し、やがて鬼神は大地を踏み鳴らしながら、奈落の底に沈んで行った。

●能「采女」

春の月夜に春日神社に参詣した僧は、境内で苗木を植える里の女に出会った。女は諸願成就の祈りに木を植えることが春日山のいわれだと言い、その山の春景色を讃えた後に、僧を猿沢の池に導いた。女は僧に向かって帝の心変りを恨んで入水した采女の物語をかたり終え、自分はその采女の幽霊であると明かして、猿沢の池に姿を消した。
供養する僧の前に再び采女の亡霊が現れた。弔いのおかげで成仏ができたことを喜び、宮廷での曲水の宴を思いおこして序ノ舞を舞いながら御代を祝福して猿沢の池の水底へ消えた。読経する僧の前に采女が現われ、補陀落にいる自分はやがて南方無垢の世界に往生するであろうと回向を謝して、奈良朝における采女の宮中での歌詠・遊楽の役割をのべ、帝の仰せで舞を舞った曲水の宴の折の晴れがましかった気持ちを想い起こして舞を舞った。数々の詩歌を引いて国土安穏を寿ぎ、自分の歌舞は讃仏乗の因の為だと重ねて回向を依頼して池の中に姿を消して行った。

●仕舞とは…能のみどころを抜粋して能装束を着けず、紋付袴等で演じる形式をいいます。

協力　山中雅志　ひかり装飾株式会社



なら本店 近鉄奈良駅前 行基像噴水前
営業時間：9:00～19:00　電話番号：0742-81-3651

献上 柿の葉すし本舗 たなか



柿の葉すし本舗たなかは
今年も慶讃能を応援しています。